

## 追悼エッセイ

今年（二〇一九年）三月に、同人の谷垣京昇（旧筆名林さぶろう）さんが逝去されました。享年八十。謹んでご冥福をお祈りいたします。

みんなから好かれた林（谷垣）さん 奥野 忠昭

林さんは病気になってから験を担いで谷垣京昇と名乗ったがどうもしっくりとこない。やはり、本名の湯浅でもなく、後から名乗った谷垣でもなく、私たちには「林さぶろう」が一番親しみやすい名前である。

林さんは、人を癒やす独特の魅力があるひとだった。彼のそばにいと、心が解放されるといふのか、こちらの気持ちも和んでくるのだ。林さんから心がざわつくような言葉を受けたことがない。作品批評で結構批判的なことを言われても、決して腹が立たないのだ。言われることがむしろ心地よいといっても大げさではない。

みんなも同じような印象を受けていたのだろう、多くの人に好かれていた。特に女性には、齒の浮くような言葉を投げかけて、みんなを笑わせるのだが、そこにはかすかに本心が見え隠れする。それでも投げかけられている女性は結構楽しげにその言葉を受け流している。決して嫌な気分ではなさそうである。

林さんの作品が私は好きだった。いや、仲間たちのほとんどがそう思っていたのではないか。ほのぼのとした温かさが感じられ、彼の人格がにじみ出ているような作品ばかりであり、それほど多くの作品を残してはいないが、そのすべてが佳作であり、失敗作と思われないものがない。どの作品も安定した書きぶりであった。

林さんの雑誌に載った最初の作品は、文学学校賞の佳作になって学校の機関誌「樹林」に載った「鳩」であり、さらにこれが文学学校を採り

上げたNHKのドキュメンタリー番組のディレクターにも気に入られ、林さんなどを中心にして作られ放映された。

その後、グループ「せる」に入会したのだが、雑誌「せる」に載った最初の作品は五十一号の「骨を喰う」である。発行日が一九九九年五月となっていて、現在、「せる」は一一〇号で、発行は二〇一九年三月となっており、ちょうど「せる」の雑誌の半分あたり、丸二〇年ほど参加していたことになる。その次に書いた「家族合わせ」と合わせて二編は私小説的で、以後の作品の根底をとらえるのに重要なものと思われるのだが、彼の独特さを示すのは動物が出てくる「鳩」系列の作品だと思う。

初期作品の傑作「ほらあな洞穴」にもアカという野良犬が出てくる。アカは限界集落に迷い込んだ犬で、主人公・秀人や副主人公・竜二も同じく、限界集落におびき寄せられた人物である。アカは副主人公の竜二になつき、集落から脱走しようとする竜二に付き従い、おそらく竜二は村人によって殺されたのだろうが、アカも村人にひどい目にあわされて、再び集落に追い返されてくる。アカの様子を見ることによって秀人は竜二の脱走の結末がわかった。

村は老人たちばかりで、若い者がいない。それで、自分たちを介護してくれる若い人間をおびき寄せ、決して村から離さない。ちょうど安部公房の「砂の女」の現代版といった村である。これは林さんの代表作のひとつだが、この作品の中に、林さんの人となりや、原風景的なものが如実に表れているように思う。この限界集落の様子が非常にリアリティがある。林さんも山村に住んだことがあるような気がしてならない。「きんま道」という表現が出てくるが、これは「木馬道」のことで、木材を山中から搬出するための用具で、堅い材でそりに似た形に作ったものであり、丸太を並べた上を滑走させる。「きんま」とも呼ばれているとネットで解説されている。このような言葉がすっと出てくるところ、このような世界への何らかの強い繋がりがあったのに違いない。

さらに、竜二はこの村から脱出しようと思うのだが、主人公は違う。秀人は村の現状を知るにつれ、この村にいつまでもいいような気がして

くる。ここに林さんのやさしさが出ている。あるいはそういう現在の社会問題に心を痛めていたのかもしれない。それに、竜二がオイナという五十代の村人の女性と険悪な状態になると、すぐさま仲裁に入り、何事もなかった状態にする。これなども林さんの日頃の態度を思わせる。私も何度かそういうところを助けてもらった。

ここではアカという犬が出てくるのだが、それほど重要な役割はしていない。ただ、このアカが竜二に付き従うのは村人が大事に飼っていた鶏をアカが食い殺すのだが、それが村人に見つかったとき竜二が自分が殺したのだと言ってアカのせいにはしない。なぜなら、そうなるアカは村人によって殺されかねないと思ったからである。ここにも林さんの動物思いの心が表れている。

以後、動物が小道具的な役割から重要な役割へと変化していく。「洞穴」の次に書かれた「びやつこ白狐」は三百枚近い長編である。昭和初期に久世家という落ちぶれてきている村の名家に井原靖代が十九歳で嫁ぐのだが、夫が早くに結核で死ぬ。夫との間にもうけた息子を立派に育てようとして、その後、苦難の生活を送る。ところが、靖代が危機に陥るごとにどこからともなく白狐が現れて彼女を救う。この白狐は、小道具ではなく、副主人公に近いような存在である。その後、鳥の目から人間世界を描いた作品などに発展し、彼の最後の作品になったのが「いたち」である。

彼の現実生活でもペットを非常にかわいがっていた。彼の年賀状には必ず、彼の名前の横にペットの名前が添えられていた。

もっとも彼の動物好きが表れたのが、飼い猫が死んだとき、その悲しみの余り死体と共に数日いっしょに寝たというエピソードである。

どうしてこうも動物をかわいがるのか。それには理由があるのではない。一人暮らしの寂しさもあるだろうが、それよりもっと根っこに何かがありそうに思う。それは、彼の父が早死にし、その後、母が再婚して腹違いの弟ができた。その結果、義父には疎んじられたのかもしれないし、母も夫に気を遣い、彼にそれほどの愛情を示し得なかったので

はないか。さらには愛妻にも裏切られ、深いところで心に傷を負い、人間より動物の純粋な姿に心を引かれていったのかもしれない。ペットは愛情を注げばそれに必ず応じる。そこに繋がり理想を感じたのだろう。また、彼の人々へのやさしさも、彼の苦難の体験が大きく影響していたのではないか。

彼は天国においてもきっとみんなから好かれ、一大集団を作っていることだろう。私も行くが、その集団の中に入れてくれるように今からお願いしておく。

谷垣京昇（林さぶろう）さんを偲んで 上月 明

林さんが亡くなられたと聞いて、一瞬言葉を失った。あまりにも突然だったのでショックを受けた。昨年三月のせる合評会に出席され、私の作品『分相応に風が吹く』に対し、「特養の話はうまく書けているが、風俗の話は浮いている」と批評してくれたのが、昨日であったように思える。

今年の正月も年賀状をもらった。ボールペンで書かれた筆跡は、筆圧が弱々しく病状が進んでいるのかと感じたが、林さんのことだから、頑張ってくれるだろうと考えていた。居なくなると寂しい限りだ。

林さんとの出会いは、平成七年阪神淡路大震災があった年だ。二十四年前になる。その年の四月から大阪文学学校通教部に入学を予定していたが、震災で神戸電鉄の線路が被害を受け通学できなくなり、やむなく入学を半年延ばし十月に大阪文学学校へ入学した。そのときに林さんも通教部に十月から入学しており、二人の出会いが始まった。

入学開講式で座席が隣り合わせになり言葉を交わした。服装に無頓着な文校生の中でモスグリーンのシャツにネクタイを締め、ダンディーな姿が目立っていた。年齢は林さんが一廻りほど上であったが、気さくに喋ることができ、文学の話で盛り上がり意気投合したのを覚えている。

その頃の私は、神戸新聞文芸に三回入選を果たし、意気揚々と大阪文

学学校に乗り込み、林さんの前で今にも芥川賞を取れる実力があるような言い方をしたと思う。林さんは、もっぱら聞き役に回っていた。後日、酒の席で、林さんから「あのときは、今にも芥川賞が取れる勢いで喋っていた」と、からかわれた。

大阪文学学校の本科に籍を置き、早速、私と林さんは作品を提出した。林さんの作品『キンモクセイの下で』が、通信教育部作品集に掲載され、私の作品は落選した。作品を書く実力は私の方が上だろうと、思っていたから落ち込んだ。しかし林さんの作品を読んでみて、それは自分自身の思い上がりであったことを悟り納得した。

大阪文学学校在学中に、NHKのクローズアップ関西という番組の取材を受け、文学に打ち込んでおられる林さんの姿が放映された。その中で「作品を書いて、生きた証を残したい」と語られていたのが印象的だった。また作品『鳩』で文校賞佳作を受賞されるなど、林さんは輝かしい実績を残された。それに良い作品を書くには、競い合えるライバルが必要であることも教えてくれた。

林さんとは、よく一緒に大阪の街中をぶらついた。今は排除されてなくなっているが、天王寺公園内には、青いビニールシートで作られたホームレスの住居や、簡易なカラオケ店が立ち並んでいた。歩きながら回転焼きを頬張り公園内を散策した。「これが小説を書く題材になるんだ。よく見ておけよ」と林さんが言った。

ジャンジャン横丁では、ウスターソースを付けた串焼きや、牛のすじ肉を味噌で煮込んだ、どて焼きを一緒に食べてビールを呑んだ。酔った勢いで小説の書き方や、提出作品について議論を交わしたのが、懐かしい思い出になってしまった。

また一人で行くには度胸がいる西成区の、あいりん地区や飛田新地へも一緒に出向いて探索し、見聞を広めた。知らない場所を見ることによって、小説を書く題材として参考になった。

大阪文学学校研究科を終了し、林さんと、ほぼ同時期に同人誌『せる』に加入させてもらってからも、文学を通して、また人生の兄貴分としてアドバイスをもらい親交を深めてきた。普段付き合っているときは、冗

談を言い合い温厚な喋り方をされるが、私の作品に関しての批評は、真剣な表情で手厳しく批評をしてくれた。今から思えば愛の鞭であったように思えてならない。

大阪文学学校入学以来、林さんは文学の良きライバルとして、私の前に君臨してきた。林さんに追いつき追い越すことを目標に、作品を書き続けてきた。それを実現できずに、お別れをしなければならぬことが、残念でならない。

私も二十数年経てば、死後の世界へ行くことになるだろう。そして林さんに会って、再会を祝してがっちり握手できると信じている。これは空想でも、願望でもないのだ。

精神科医でもあるエリザベス・キューブラ・ロスの自伝で、『人生は廻る輪のように』（上野圭一訳）を読んで、『死後のいのち』について考えさせられた。終末医療の先駆者である彼女が、臨死体験者のデータから『幽体離脱』を書いている。人間の肉体から靈魂が幽体を伴って抜け出すというものである。臨死体験は、幽体離脱状態で、あの世に入り、死後の世界を見て、引き返してくる体験のことである。

少しだけ文章を引用すると、「すべての症例の臨死体験には共通性があり、体験の真实性を強く示唆していた。それまでのわたしは、死後の世界などまったく信じていなかった。しかし、データが集まるにつれて、それが偶然の一致でも幻覚でもないことを確信するようになった。……死の体験はまったく苦痛をとまわらないこと、二度とこちら側に帰ってきたいと思わないことも、すべての症例に共通する体験だった。……臨死からの生還者の報告を総合すると、先立った両親、祖父母、親戚、友人などが姿をみせてくれる。その場面は生還者たちに、よろこばしい再会、体験の共有、積もる話の交換、抱擁などとして記憶されている」とある。

この本以外にも、多くの人が似た臨死現象の体験を述べている。死の淵に立たされた人が、あの世を垣間見て、すでに死んでいる人々と出会い、再びこの世に帰ってくる体験をされているのである。だから『死後の世界』が存在することを、信用してもいいと私は思っている。

私の年齢から、遅くともあと三十年で死後の世界に行くことになる。そこで林さんに出会えるのが楽しみだ。

今は同人『せる』で思いっきりおもしろい作品を書き、それを手土産に死後の世界で語り合おう。

「待って居てくれ、林さん！」

林さんのこと

谷口あさこ

谷垣さんではなく、あえて林さんと書きます。

林さんのことを思い出すときは、いつも、林さんと私は窓の外に夜景が流れる電車の中にいる。合評会で隣に座ってるときとか、飲み会でお話しているときのことではない。なぜか、電車の中にいるときのことか、思い出される。

と言っても、ここで語れるような具体的なエピソードなど何もない。ただ例会の帰りに同じJRに乗って、作品のこととか、時事ネタとか、猫のハマオのこととか、他愛のない話をしゃべっていたのに過ぎない。そして、それぞれの下車駅で「じゃ」と言って別れるのだ。扉の開いた先はいつも外灯の灯る夜だった。

同じことを何年も繰り返してきたからこそその記憶の風景。まさか、その繰り返しに終わりがあるとは思っていなかった。

にかつと笑って「僕は谷口さんのファンですから」と照れながら言っていた姿が懐かしい。私、大きな応援者を失ってしまったんですね。全然お礼も言っていなかった。

林さん、ありがとうございました。林さんのおかげで、せるが楽しかったです。

そう言ったら、天国でもにかつと照れ笑いしてくれるかな。

林さぶろうさんのこと

津木林洋

私の留守中に林さんから電話がかかってきたことがある。家内が受けたのだが、その時「林さぶろうです」と名乗ったという。電話でフルネームを言うことが珍しいので、家内の頭には一発でその名前が定着した。従ってその後改名した谷垣京昇は我が家では使われず、林さぶろうというのがもっぱらその人の名前だった。林さんではなく、林さぶろうさんときっちり言わなければ、何となく感じが出ないというふうになってしまった。

林さんが「せる」に入会したのは一九九九年のことだったと思う。上月さんと一緒に奥野さんが誘ったのだ。その時、奥野さんにペンネームにした方がいいと言われて林さぶろうにしたと聞いた。由来を聞かなかったのはごく普通の名前に思えたからだ。三郎というような漢字ではなく、さぶろうと平仮名にしたところに林さんのこだわりを感じたが、今から思えばその由来をきちんと聞いておけばよかったと思う。

翌二〇〇〇年に文校修了生の玄月さんが芥川賞を受賞して、それを機にNHK大阪が大阪文学学校のドキュメンタリー番組を制作した。三人の文校生を取り上げたのだが、そのうちの一人が林さんだった。画面には林さんが長年勤めた金属加工の工場を訪れる場面が映り、原稿用紙に向かって手書きしている姿が放映された。手書きとはいかにも物書きふうで恰好いいと思い、そのことを告げると、「いやあ、あれはヤラセでんねん。手書きなんかしたことはないのに、ワープロでは感じが出ないと言われて仕方なく」と林さんは苦笑いをした。

そんな林さんから、某文学賞に応募したいので読んでくれないかと言われたことがある。なぜ私にと思ったが、純文学でもないエンタメでもない作品を書いている私に近いものを感じてくれたのかと引き受けることにした。百枚ほどの作品で、川の中州を舞台に、職を失った男と周りの人間たちとの関わりを描いている。ヤクザ、ホームレス、スナックのママとホステスなど一癖も二癖もある人物を描きながら、人生のペーソスを感じさせる林ワールドが立ち上がっている。ただ、賞レースを勝ち抜くにはどこかひりひりした部分もあった方がいいのではないかと思いい、一人ぐらいどうしようもない悪人を登場させたらどうかと提案して

みた。林さんは考えてみまずと答えたが、書き直して応募したのかどうかも分からず、数ヶ月後の賞の発表には林さんの名前はなかった。

その作品が「せる」64号に載った「橋」である。ワルは出てくるが、本当の悪人は出てこない。一読、あれ、この作品、こんなに面白かったっけと私は思った。書き直しはしたが、私の提案を採用しなかったのは、そうすると自分の世界が壊れてしまうと林さんは考えたのだろう。賞に対する戦術を考えた私は、それに囚われて作品の良さが見えていなかったのかもしれない。

自分の世界を持つのは強い。今更ながら、私は林さんの作品に教えられている。

浜男 西村 郁子

谷垣京昇とペンネームを改められても、わたしは「林さん」とお呼びしていた。タイトルの浜男とはペンネームが「林さぶろう」であった十数年前のエピソードである。

せるの合評会の夜だったか、作品合評が終わった宿の座敷で泊り組の同人が談笑することがある。そのときに林さんから聞かされたのが飼い猫の話だった。『わしがな……』と切り出すいつもの口調で始まった話は、飼い猫が死にその猫と何日も布団を被って寝込んでいたというシヨッキングな内容だった。仕事も休んでいたのだろう。近くに住む娘さんが異変をききつけ林さんの家に行くと、新聞は何日もポストに溜まっており、鍵を開けて中に入ると父親が死んだ猫と同じ布団で寝ているのを見た。娘さんはすぐさまとってかえしペットショップに行つて猫を連れて林さんのもとへ届けた。そういうと林さんは携帯を取り出して、写真をみせた。『浜男いうねん』画面には洋猫の白と茶トラの毛色の猫がいた。

「かわいい」とわたしはいいながらも、その前に聞いたペットロスの林さんのことが気になって仕方がなかった。

その後も林さんは楽しそうに浜男の話をしてくれた。やがて浜男を林さん

の元に届けた娘さんと同居となり、林さんと浜男は一階、娘さん夫婦と彼らの飼い犬たちが二階の生活になったことも聞いた。

浜男が亡くなったときいたのは数年前のこと。わたしは前回のようなペッコロスがでなかったのか気になった。ペット霊園にお墓を作りお参りしているのだと、それを話してくれたときにはロス期は済んでいたのだろう。

去年、せるの例会の場所へ向かう道で林さんが前を歩いているときがあった。声をかけると、自分は遅いから先に行つてと言われた。何度かの入退院を繰り返すも必ずせるの例会に戻ってきた林さんだった。わたしなら、同じことができるだろうか。否、わたしも同じように死ぬときまで小説のことを思つて生きていきたいと思う。林さんのその姿を決して忘れないでいよう、先代猫と浜男のことと共に。

### 林さんを偲ぶ

益池 成和

「せる」一〇〇号記念号の巻末の総目次を辿つてみると、51号に初めて林さんの名前が作者として出てくる。発行の日付は一九九九年五月十日、「骨を喰う」という作品である。すなわち同人としてのお付き合いが、その日から始まったということである。

あらためて考えてみるとほぼ二十年になる。つい先日のような思いにもとらわれるが、結構それなりの時間を仲良くさせていただいた。

随分勤勉な書き手であった。病を得られる前まではほぼ三号に一作、毎年のように発表されている。同人誌にとっては貴重でありがたい人だった。

大病をされて、ペンネームを林さぶろうから谷垣京昇に変更されてからも、三作残されている。小説を書けなくなった者としては、なんともうらやましい気がしないでもない。また、それだけいべき何かをより多く持っていた人ではなからうか、とも思つた。追悼の思いもあつて作品を三作読み返してみた。残念ながら「せる」での処女作「骨を喰う」は手元に本が見当たらなかったため読むことがかなわなかったが、

66号掲載の「克っちゃん」と81号の「行きどまりの旅」、そして谷垣京昇に改名されてからの94号「がん病棟」を読んできた。

「克っちゃん」は二〇〇四年七月の作品である。いささか適切さに欠けるかも知れないが、一種の老いらくの恋を描いた、面白く、哀感漂う作品である。留置場で知り合った強面の男に気に入られ、男の女である三十女の面倒を頼まれ、その女といい仲になってしまおうという話である。主人公は定年後の再就職中の六十代の男。多分にこのときの林さんの状況や思いが反映されていたのではなからうか。女とのセックスがかなったときの記述が微笑ましくも、どことなくほろ苦い。

「行きどまりの旅」は「克っちゃん」から五年後の発表作である。今度は娘家族と同居する話で、娘への愚痴みたいなものからはじまっている。愚痴とは云っても、決して深刻なものではなく、林さんお得意の微量のユーモアがそこに施されている。この作品の読みどころは、逃げていった妻の死後の後始末を引き受けてしまう場面だろう。

「がん病棟」は改名されたあとの小説で、二〇一三年の作品。病にまつわるエピソードは多分にご自分の体験に基づいたものではないだろう。ただ、この作者らしく決してこちらも深刻な味付けはされていない。病のことを柱に、娘をもつ元同僚女性との淡い恋愛話が作品たらしめている。

合評会の席ではいつも柔和な笑顔の人という印象が残っている。あまり声高にものを云ったり感情を顕わにすることはほとんど無かった。けれどもそんな中、自身のこだわりや生き様をさらけ出された場面にごく稀ではあったが、出会った印象も残っている。

あくまでも私見だが、林さんは自分自身を完全なる弱者と規定し、視線の高い者達への厳しい眼差しを向け続けることに、自身の存在価値を見いだされていたのではなからうか。だからこそその多作であり、作風であったと思う。

あれは何年前のことだったのだろう。「せる」ではいまだに宿泊付きの合評会を行っている。むしろメンバーの高齢化や諸般の事情で、今では全員が泊まるわけではないが。

私は入会を許されてからは大抵五、六人部屋で宿泊をするのだが、一度だけ二人部屋にまわったことがある。同室になったのが林さんだった。正確には大病されたあとだったので、谷垣京昇さんではあったが。

二人で部屋に入ると、申し訳なきそうに出入り口近くの布団にさせてくれと言われた。部屋に手洗いはなかった。私の睡眠を阻害したくない気遣いであった。

眠りにつくまで小一時間ほどあったはずである。二人だけの部屋で何を語り合ったのだろう。おそらくは病気のことも少しはあったに違いないが、その他のことは思いの中に残ってはいない。もしかすると、林さんが合評会で泊まられたのは、この日が最後だったかも知れない。

この同人誌では会を離れての個々の付き合いはほぼない。合評会や毎月の例会後で皆でテーブルを囲むことはむろんあるが、プライベートで肩を並べて杯を傾け合う事はない。だから林さんとも、ほぼ二十年に渡る付き合いではあったが、そのような機会には恵まれなかった。

私は無神論者であり、来世など悪しき宗教者の詭弁であるとしか捉えない輩ではあるが、もし可能ならば、林さんと横並びで、カウンター越しのしゃべり上手な小太りのママ相手に、文学の話や好みの女性の事など、赤らんだ笑顔をさらしながら、語り合ってみたくもある。おそらく女性自慢なら、私はひたすら聞き役に回るに違いないが。

ご冥福を祈ります。

谷垣京昇さんへ 柳生 時実

谷垣さんというよりも、私は以前のペンネームである、林さん、といつまでたっても呼んでいました。いつも笑顔で話をしてくれる「林さん」は、私の作品を丁寧に読みこんで合評してくれました。皆に厳しい合評をされて落ち込んでいる私にそっと近づいて励ましてくれた事が忘れられません。林さんの波乱万丈な人生をたくさんの作品を通して知りました。私は林さんの作品が大好きで、いつも一番はじめに読んでいました。また娘さんと同居され

犬をたくさん飼っていて散歩が大変だと嬉しそうに笑い、犬の保育園の話をよくしていました。まだまだ作品を読みたかったです。林さぶろうさん、今までありがとうございます。